

42036

教科書文庫

4
815
41<1932
20000 68972

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

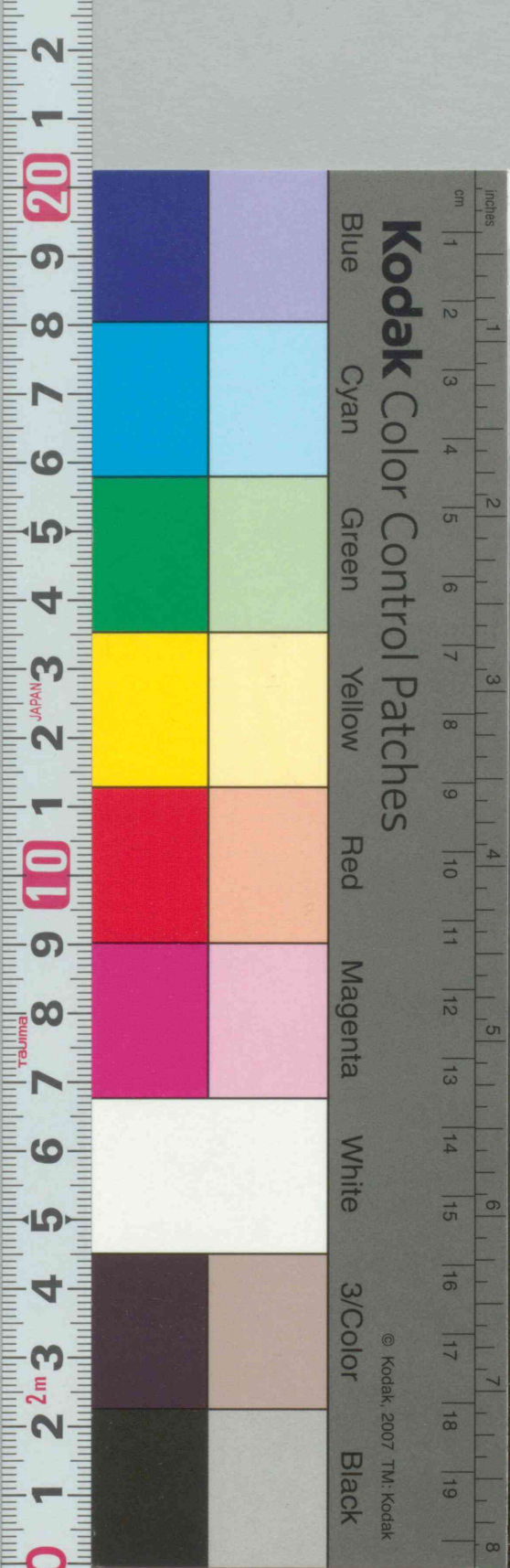


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
815
BBT

修正  
新制  
中學  
文典

文學博士吉田義則著

教科  
41  
200



資料室

濟定檢省部文

用科文漢語國校學中 日四月一十年七和昭

教科書文庫

4

815

41-1932

2000068972

42  
815  
昭7

正修

新

制

中學

文典



広島大学図書

2000068972



例 言

一本書は新教授要目に準據して中學校第一學年に於ける國文法教科書に充てんがために編纂せるものなり。

一本書は煩瑣なる理論を避け、極めて平易簡明なる説明を與へて、口語・文語の異同を知らしめ、用言の活用に練熟せしむることに力を用ひたり。

一例题并に練習問題は成るべく小學校國定教科書中よりこれを探り、以て小學校との聯絡をはかり、かねて生徒の興味を喚起することに力めたり。

昭和六年二月

著 者 識 す

修正に當りて

一前版教科書の練習問題は中學校第一學年の生徒にとりては、その程度や、高さかの嫌ありしを以て、本修正版に於ては特にこの點に意を注ぎ、最も妥當にして而も興味多きものを載せたり。

一動詞の説明は活用形を前に、活用の種類を後にせり。

昭和七年八月

著者識す

目次

單語篇(上)

第一章 單語・文	一
第二章 名詞	二
第三章 數詞	四
第四章 代名詞	六
第五章 動詞	七
第六章 形容詞	九
第七章 副詞	一〇
第八章 接續詞	一三
第九章 感動詞	一四

第十章 助動詞……………六

第十一章 助詞……………七

單語篇(下)

第一章 文語動詞……………九

一 文語動詞の活用形……………九

二 文語動詞の活用の種類……………三

(イ) 正格活用……………三

一 四段活用……………三

二 上二段活用……………三

三 上一段活用……………四

四 下二段活用……………三

五 下一段活用……………七

(ロ) 變格活用……………六

一	カ行變格活用……………六
二	サ行變格活用……………六
三	ナ行變格活用……………九
四	ラ行變格活用……………三
三	動詞活用の識別法……………三
第二章	口語動詞の活用……………三
第三章	形容詞の活用……………四
第四章	音便……………五
第五章	文語助動詞の種類及活用……………五
一	受身の助動詞……………五
二	可能の助動詞……………五
三	使役の助動詞……………五
四	崇敬の助動詞……………六

五 時の助動詞……………五

六 推量の助動詞……………六

七 打消の助動詞……………六

八 指定の助動詞……………六

九 咏嘆の助動詞……………六

一〇 比況の助動詞……………六

二 希望の助動詞……………六

第六章 口語助動詞の種類及活用……………六

一 受身の助動詞……………六

二 可能の助動詞……………六

三 使役の助動詞……………六

四 崇敬の助動詞……………六

五 時の助動詞……………七

六 推量の助動詞……………七

七 打消の助動詞……………七

八 指定の助動詞……………七

九 比況の助動詞……………七

一〇 希望の助動詞……………七

第七章 文語動詞と文語助動詞との接續……………七

第八章 口語動詞と口語助動詞との接續……………八

第九章 助詞の用法……………八

一 ぞなむこそ……………八

二 やか……………八

三 ばともども……………八

四 と……………八

五 だにすらさへ……………八

六	なな……そ……………	三
七	ばやなむ……………	三
八	にへ……………	三
九	がにを……………	三
一〇	てで……………	四
第十章	接頭語・接尾語……………	六
第十一章	品詞の轉成……………	九
第十二章	紛れ易い品詞……………	一〇

附録 文法上許容ニ關スル事項  
表

- 第一表 文語動詞活用表  
口語動詞活用表
- 第二表 文語形容詞活用表  
口語形容詞活用表

- 第三表 文語助動詞活用表
- 第四表 口語助動詞活用表
- 第五表 動詞助動詞接續法
- 第六表 接續助詞と動詞・形容詞との接續法

目次終

正修 新制 中學 文典

文學博士 吉澤義則 著

單語 篇 (上)

第一章 單語・文

- 一 花 咲く。
- 二 犬 が 走る。

右の例で、傍線の施してある一つくゝの語は、皆それくゝ或意味を表してゐる。かやうに或意味を表す一つくゝの語を單語といふ。しかして右の例のやうに、いくつかの單語が集まつて纏

單語



文  
品詞

まつた考を表してゐるものを文といふ。單語をその意味や働きや形の上から之を左の十種に分ける。しかしてその各を品詞といふ。

- 名詞
- 數詞
- 代名詞
- 動詞
- 形容詞
- 副詞
- 接續詞
- 感動詞
- 助動詞
- 助詞

### 第二章 名詞

- 一 東京は日本の首府なり。
  - 二 山には乃木將軍を祭れる神社あり。
  - 三 儉約は美德である。(口)
  - 四 野邊の若草に春の日は照つてゐる。(口)
- 右の例で、傍線の施してある語は、いづれも事物の名をあらはし

名詞

#### 練習一

てゐる。かゝる語を名詞といふ。

#### 練習

##### 一 次の文中から名詞を拔出せ。

- (イ) 春は若草山の芝綠にもえたち、三月堂二月堂霞につままれてさながら夢の如し。
- (ロ) 調子のよい蜜柑採歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、のどかに聞えてくる。
- (ハ) 一切經は佛教に關する書籍を集めた叢書である。
- (ニ) 黄金の鎌のやうな弦月が高く鋭く光を放つてゐる。
- (ホ) 日本海の手戦で東郷大將の名が世界に轟いた。

##### 二 名詞の定義をあげよ。

第三章 數 詞

數 詞

練習二

- 一 我が校は去る四月十日に開校第二十周年の記念式を舉行せり。
  - 二 一寸の蟲にも五分の魂。
  - 三 鉛筆一ダースの價は五拾錢です。(口)
  - 四 第一號から第百號まで合格です。(口)
- 右の例で、一寸五分一ダース五拾錢は事物の數量をあらはし、四月十日第二十周年第一號第百號は事物の順序をあらはしてゐる。かやうに事物の數量又は順序を表す語を數詞といふ。

練習

- 一 次の文中から數詞を拔出せ。

- (イ) 五丈三尺の大佛一千二百年の面影を殘せり。
- (ロ) 我が國は三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつた。
- (ハ) ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。
- (ニ) 十で神童十五で才子二十過ぎてはたゞの人。
- (ホ) 左から二番目が第一學年の教室です。
- (ヘ) 僕は受験生三百人の中、十五番で入學しました。
- (ト) 二十五の五分の二は十である。

二 數詞を説明せよ。

### 第四章 代名詞

- 一 予は昨日かれを學校に訪ひぬ。
- 二 こはわれの知るところにあらず。
- 三 汝は誰ぞ、そを何處にか負ひて行く。
- 四 私はこれでもどれでも結構です。(口)
- 五 あのかたはどちらに行きましたか。(口)

代名詞

人代名詞

指示代名詞

右の例で、傍線の施してある語は、皆名詞の代りに用ひられてゐる。かゝる語を代名詞といふ。

又、右の例の中で、予・かれ・われ・汝・誰・私・あのかたは人の名の代りに用ひられてゐるもので、これを人代名詞といひ、こ・そ・何處・これ・どれ・どちらは事物場所方向を示してゐるもので、これを指示代名

詞といふ。

練習三

練習

- 一 次の文中から代名詞を拔出して、その種類を答へよ。
  - (イ) 農夫はあの山のこなたを通つて、あの川のあちらに行つた。
  - (ロ) あれは僕の作つた曲だ。
  - (ハ) 君はそれとこれとどつちが好きか。どれでも君の好きな方を上げよう。
  - (ニ) おまへが今學問をやめるのは、私が今この機を切つてしまふのと同じだ。
  - (ホ) 蜻蛉釣今日はどこまで行つたやら。
- 二 代名詞の定義をのべよ。

### 第五章 動詞

- 一 蝶は舞ひ、鳥は歌ふ。

動詞

練習四

二 庭に梅の木あり。  
 三 朝早く起きる。(口)  
 四 こゝに鳩が居る。(口)

右の例で、舞ひ、歌ふ、起きるは事物の動作を、あり、居るは存在を表してゐる。かやうに事物の動作存在を表す語を動詞といふ。

練習

一 次の文中から動詞を抜出せ。

- (イ) 風が吹く、花が散る、蝶々のやうに花が舞ふ。
- (ロ) 蠶は絲を吐き、蜂は蜜を作る。
- (ハ) 秋は春日の社神さび、手向山の紅葉夕日にはゆる様殊に見所あり。
- (ニ) さや／＼揺れる葉蔭では露の散るのがうれしいか、ころ／＼と蟲が啼く。

第六章 形容詞

二 動詞を説明せよ。

- 一 松青く、砂白し。
- 二 終夜烈しき風吹く。
- 三 良い薬は苦い。(口)
- 四 夏は暑く、冬は寒い。(口)

右の例で、傍線の施してある語は、事物の性質若くはありさまをあらはしてゐる。かやうに事物の性質若くはありさまをあらはす語で、言ひ切る時の形の終が、口語ならばい、文語ならばしとなるものを形容詞といふ。

練習五

練習

一 次の文中から形容詞を拔出せ。

- (イ) 夏の短い北海道では秋の來るのが早い。
- (ロ) 光の強い部分もあれば弱い部分もある。
- (ハ) 暗い寒い冬から明るい暖い春に移ります。
- (ニ) 低き家狭き町、淋しき松、高き稲の穂、鼻の先に並びたる連山をさなき頃より見なれたる一軒家、皆莞爾として我を迎ふるに似たり。
- (ホ) 三度たく飯さへこはしやはらかし心のまゝにならぬ世の中。

二 形容詞の定義をのべよ。

第七章 副 詞

一 潮次第に満ち、水さかさまに流る。

岸の柳の葉は枯れて、ほろ／＼とこぼれる。(ロ)

二 この花頗る美し。

この川の流は非常にものすごい。(ロ)

右の例で、(一)の次第には動詞満ち、さかさまには動詞流る、ほろほろとは動詞こぼれるの意義を限定し、(二)の頗るは形容詞美し、非常には形容詞ものすごいの意義を限定してゐる。かやうに動詞や形容詞の意義を限定する語を副詞といふ。

三 彼はいと速に走る。

もう少し静に讀みなさい。

右の例で、いとは副詞速にの、もう少しは副詞静にの意義を限定してゐる。かやうに副詞は又他の副詞に添うてその意義を限定することがある。

故に副詞は動詞形容詞又は他の副詞に添うてその意義を限定

練習六

する語である。

練習

一 左の文中の副詞を指摘し、且つその副詞がいづれの語の意味を限定してゐるかを説明せよ。

(イ) 雨はらくくと降りそゞぐ。

(ロ) いや／＼降りしきる雨に、水はますます増加せり。

(ハ) 彼は最もまじめに仕事を勵む。

(ニ) さえたはさみの音がちよきん／＼と聞えて来る。

(ホ) 今朝は雲霧なごりなく晴れて、海山はる／＼と見渡さる。

(ヘ) 白い雲がぼつちり浮んでは、又一たまりもなく吹流される。

二 副詞を説明せよ。

第八章 接 續 詞

接續詞

練習七

練習

一 次の文中から接續詞を抜出せ。

(イ) 諸車の通行を禁ず。但し郵便車はこの限りにあらず。

(ロ) 霞か雲かはた雪か。

(ハ) 飲食を節せよ。然らざれば健康に害あり。

(ニ) 今日は風は吹くだらう。しかし雨は降るまい。

一 國語・英語及び、數學の三科を學ぶ。

二 文を學び、且つ武を習ふ。

三 春は來りぬ。されど鶯は未だ鳴かず。

右の例で、及び、且つ、されどは上下の語句、文章を接續するために用ひられてゐる。かゝる語を接續詞といふ。

(ホ) 明朝或は明晩はお尋ねいたさうと思つてゐます。もつとも雨天でしたら失禮いたすかも知れません。

二 次の——のところに適當な接續詞を入れよ。

(イ) 私は随分盡力した。——結果は不成功であつた。

(ロ) 秋は来りぬ。——暑氣未だ退かず。

(ハ) 彼は學力が優秀で、——品行が方正です。——惜しいことに身體が健康でありませぬ。

第九章 感動詞

一 あゝ、哀しいかな。

二 いざや、歌はん諸共に。

三 さてく、残念なことをしました。(口)

感動詞

練習八

四 おや、大變ですな。(口)  
右の例で、傍線を施した語は、いづれも感動した時に發する語である。かゝる語を感動詞といふ。

練習

一 次の文中から感動詞を抜出せ。

(イ) 松島やあゝ松島や松島や。

(ロ) あはれ人の世のはかなさよ。

(ハ) すは敵よせ来れり。

(ニ) あら風が吹いて來た。

(ホ) おやく、まあ可愛らしい。

(ヘ) えゝ口惜しい。

第十章 助動詞

助動詞

練習九

一 明日は雨降らむ。  
 二 よく勉強又よく遊ぶべし。  
 三 生徒、先生に褒めらる。  
 四 僕は昨日朝早く旅行に出かけて往つた。(ロ)

右の例で、むべし、らる、及びたは何れも動詞に添うて其の意義を助ける。かゝる語を助動詞といふ。

練習

- 一 次の文中から助動詞を摘出せよ。  
 (イ) 山門高き松風に昔の音やこもるらむ。  
 (ロ) 夜の更けぬ間にこの書を読み終へむ。

- (ハ) 人に車を押させる。  
 (ニ) 雨は降るだらう、しかし風は吹くまい。  
 (ホ) 母校の運動會に誘はれた。  
 二 次の文を口語文になほせ。  
 (イ) 明日雨降らむ。  
 (ロ) 文字を習はしむ。  
 (ハ) 犬人に蹴らる。

第十一章 助動詞

- 一 兄は畫を畫く。  
 二 鳥が鳴く。  
 三 犬すら恩を知る。



助詞  
テニヲハ

練習一〇

- 四 東京から歸る。(口)
- 五 鉛筆で書く。(口)

右の例のはをがすがすからでは種々の語について、その語に意義を添へ、又は他の語との關係をあらはしてゐる。かゝる語を助詞といふ。助詞は又テニヲハともいふ。

練習

一 次の文中の助詞を指摘せよ。

- (イ) 學も徳も高し。
- (ロ) 雨降り風さへ吹く。
- (ハ) 花ありやなしや。
- (ニ) 千丈の堤も蟻の穴から崩れる。
- (ホ) 勉強さへすればどんなことでも出来る。

十品詞  
體言  
用言

文語動詞の活用形

(へ) 君は神戸から倫敦へ行く航路を知つてゐるか。  
以上説き來つた所によつて、單語に十種の別、即ち十品詞のあることが明かである。その中、名詞、代名詞、數詞を體言といひ、動詞、形容詞を用言といふ。

單語篇(下)

第一章 文語動詞

一 文語動詞の活用形

ま	むずば	な	むずば
(第一形)		(第一形)	
み	む	ぬ	ぬ
(第二形)		(第二形)	
つ	む	ぬ	ぬ
(第三形)		(第三形)	
く	む	ぬ	ぬ
(第四形)		(第四形)	
人	む	ぬ	ぬ
(讀)		(死)	

語幹  
語尾  
活用形

未然形

連用形

め ども (第五形)  
め (第六形)

ぬれ ども (第五形)  
ぬ (第六形)

動詞は右の如く變化しない部分と、變化する部分とを有する。その變化しない部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といひ、その變化する各の語形を活用形といふ。動詞は必ず五十音圖の一行内で活用する。即ち讀むはマ行、死ぬはナ行に活用する類である。

第一形 この形は多く「ば」「む」「ず」などに連つて、動作のまだ成立しない意をあらはすに用ひる形であるから、これを未然形と名づける。

第二形 この形は多く用言に連ねる時に用ひる形であるから、これを連用形と名づける。

終止形

連體形

已然形

命令形

文語動詞の活用の種類

第三形 この形は多く文を終止するに用ひる形であるから、これを終止形と名づける。なほこの形が動詞の本體である。

第四形 この形は多く體言に連ねる時に用ひる形であるから、これを連體形と名づける。

第五形 この形は多く「ば」「ど」「ども」などに連つて、動作の已に成立した意をあらはすに用ひる形であるから、これを已然形と名づける。

第六形 この形は命令の意をあらはすに用ひる形であるから、これを命令形と名づける。

二 文語動詞の活用の種類

動詞の活用の形式は一様でない。これを正格活用(五種)と變格

正格活用  
四段活用

活用(四種)とに分ける。左にその各について説明する。

(イ) 正格活用

一 四段活用

動詞の語尾が五十音圖のアイウエの四段に互つて變化するものを四段活用といふ。この活用に屬する動詞は左の六行に存して、動詞の中でその數が最も多い。

立	押	書	動詞
つ	す	く	語幹
立 <sup>ナ</sup>	押 <sup>ナ</sup>	書 <sup>カ</sup>	未然
た	さ	か	連用
ち	し	き	終止
つ	す	く	連體
つ	す	く	已然
て	せ	け	尾
て	せ	け	命令

上二段活用

二 上二段活用

動詞の語尾が五十音圖のイウの二段に互つて變化し、且つウ段に属する動詞は左の六行に存在してゐる。

釣	飲	習
る	む	ふ
釣 <sup>フ</sup>	飲 <sup>ブ</sup>	習 <sup>フ</sup>
ら	ま	は
り	み	ひ
る	む	ふ
る	む	ふ
れ	め	へ
れ	め	へ

落	盡	動詞
つ	く	語幹
落 <sup>ナ</sup>	盡 <sup>ブ</sup>	未然
ち	き	連用
ち	き	終止
つ	く	連體
つ	く	已然
つ	く	尾
れ	れ	命令
ち	き	命令
よ	よ	命令

上二段活用

三 上二段活用

動詞の語尾が五十音圖のイ段にのみ活用し、且つこれに<sup>レ</sup>の添うて活用するものを上二段活用といふ。この活用に屬する動詞は左の六行に存在してゐる。

懲	老	恨	生
る	ゆ	む	ふ
懲 <sup>コ</sup>	老 <sup>オ</sup>	恨 <sup>ウ</sup>	生 <sup>オ</sup>
り	い	み	ひ
り	い	み	ひ
る	ゆ	む	ふ
る	ゆ	む	ふ
る	ゆ	む	ふ
れ	れ	れ	れ
り	い	み	ひ
よ	よ	よ	よ

射	動詞
る	語幹
(射 <sup>イ</sup> )	未然
い	連用
い	終止
いる	連體
いる	已然
いれ	尾
いよ	命令

下二段活用

四 下二段活用

動詞の語尾が五十音圖のウエの二段に互つて變化し、且つウ段に<sup>レ</sup>の添うて活用するものを下二段活用といふ。この活用に屬する動詞は五十音圖中の各行に互つて存在し、その數の多

居	見	干	似	著
る	る	る	る	る
(居 <sup>ウ</sup> )	(見 <sup>イ</sup> )	(干 <sup>エ</sup> )	(似 <sup>エ</sup> )	(著 <sup>オ</sup> )
ゐ	み	ひ	に	き
ゐ	み	ひ	に	き
ゐる	みる	ひる	にる	きる
ゐる	みる	ひる	にる	きる
ゐれ	みれ	ひれ	にれ	きれ
ゐよ	みよ	ひよ	によ	きよ

いことは四段活用の次に位してゐる。

求む	加ふ	兼ねぬ	建つ	任す	受く	得	動詞
求 <small>モ</small>	加 <small>ス</small>	兼 <small>カ</small>	建 <small>タ</small>	任 <small>カ</small>	受 <small>ウ</small>	(得 <small>ウ</small> )	語幹
め	へ	ね	て	せ	け	え	未然
め	へ	ね	て	せ	け	え	連用
む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	終止
む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	連體
む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	已然
め	へ	ね	て	せ	け	え	命令
よ	よ	よ	よ	よ	よ	よ	尾

下一段活用

五 下一段活用

動詞の語尾が五十音圖の「エ」段にのみ活用し、且つこれに「レ」の添うて活用するものを下一段活用といふ。この活用に屬する動詞は、力行のみに存在し、而も「蹴る」の一語あるのみである。

蹴る	動詞	植う	隠る	燃ゆ
(蹴 <small>セ</small> )	語幹	植 <small>ツ</small>	隠 <small>カ</small>	燃 <small>モ</small>
け	未然	ゑ	れ	え
け	連用	ゑ	れ	え
ける	終止	う	る	ゆ
ける	連體	う	る	る
けれ	已然	う	れ	れ
けよ	命令	ゑ	れ	え
		よ	よ	よ

變格活用  
カ行變格活用

(口) 變格活用

一 カ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のイ・ウ・オの三段に互つて活用し、且つウ段に<sup>レ</sup>の添うて活用するものをカ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞は「來」の一語あるのみである。

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
來	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ

サ行變格活用

二 サ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のイ・ウ・エの三段に互つて活用し、且つウ段に<sup>レ</sup>の添うて活用するものをサ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞は「爲」の一語あるのみである。

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
爲	(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ

但し、<sup>レ</sup>は他の語と熟合してサ行變格活用の動詞を作る。

罪<sup>ズ</sup>す 旅<sup>ス</sup>す もの<sup>ス</sup>す 勉強<sup>ス</sup>す 辱<sup>ス</sup>くす

審<sup>ズ</sup>に<sup>ス</sup>す 講<sup>ズ</sup>ず 論<sup>ズ</sup>ず 等。

三 ナ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のアイウエの四段に互つて活用し、且つウ段に<sup>レ</sup>の添うて活用するものをナ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞には「死ぬ」「往ぬ」の二語あるのみである。

動詞	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
往死	往 <sup>死</sup>	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ

ナ行變格活用

ラ行變格活用

四 ラ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のアイウエの四段に互つて活用し、イ段で言ひ切るものをラ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞は「有リ」「居リ」「侍リ」の三語あるだけである。

侍	居	有	動詞
り	り	り	語幹
侍	居	有	未然
			連用
			終止
			連體
			已然
			命令
			尾

猶、高<sup>○</sup>か<sup>○</sup>り<sup>○</sup>美<sup>○</sup>し<sup>○</sup>か<sup>○</sup>り<sup>○</sup>のやうに、形容詞高<sup>○</sup>く<sup>○</sup>美<sup>○</sup>しく<sup>○</sup>にこの動詞ありのつゞいて約められたものや、明瞭<sup>○</sup>なり<sup>○</sup>平然<sup>○</sup>たり<sup>○</sup>のやうに副詞明瞭<sup>○</sup>に<sup>○</sup>平然<sup>○</sup>と<sup>○</sup>に同じく動詞ありのつゞいて約められたものも亦ラ行變格活用である。これらを一括して形容動詞とも呼ん

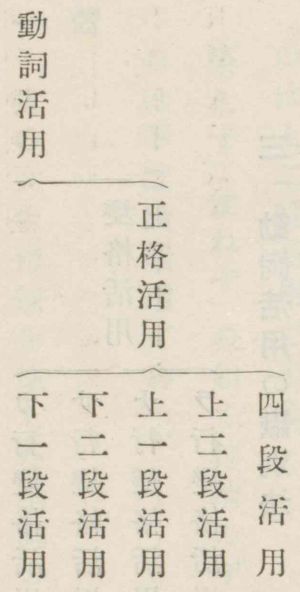
形容動詞

である。

口語では、かりたり<sup>○</sup>の活用形は消滅し、なり<sup>○</sup>の活用は左圖の如く變化した。

靜	語幹/語尾
か	未然
だ	連用
だ	終止
だ	連體
な	假定
なら	

以上述べた動詞活用の種類を表示すれば左の通りである。



カ行變格活用  
 サ行變格活用  
 ナ行變格活用  
 ラ行變格活用

三 動詞活用の識別法

以上述べた正格變格九種の活用中、左の六種に屬する動詞は、その數が極めて少いから、悉くこれを語記せねばならぬ。

上一段活用 射る 鑄る 著る 煮る 似る 干る 見る

(顧みる、鑑みる、  
惟みる、試みる)

居る 率ゐる

下一段活用 蹴る

カ行變格活用 來

サ行變格活用 爲

(この外、信ず、  
勉強すの類)

ナ行變格活用 死ぬ 往ぬ

ラ行變格活用 有り 居り 侍り

○四段上二段下二段の三活用に屬する動詞は、その數が甚だ多

いけれども、左の識別法によつてこれを知ることが出来る。

一 「讀まず」「書かず」の如く打消のずがア段の音につくものは四段活用である。

二 「落ちず」「悔いず」の如く打消のずがイ段の音につくものは上二段活用である。

三 「榮えず」「兼ねず」の如く打消のずがエ段の音につくものは下二段活用である。

練習一

一 次の文中、傍線を施した動詞の活用の種類と活用形の



名とを示せ。

- (イ) 大空に聳えて見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり。
- (ロ) 不自由を常と思へば不足なし。心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。
- (ハ) 常に良き著述に親しむ者は只獨り居れども寂しきことを覺えず。
- (ニ) 浪にたゞよふ氷山も來らば來れ恐れんや海まきあぐるたつまきも起らば起れ驚かじ。
- (ホ) 朱硯に葡萄のからの散亂す。
- (ヘ) 子のためよかれと思ふは親の情なり。

二 左の動詞を活用によつて類別し、その六つの活用形を

表で示せ。

- |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 射る。 | 老ゆ。 | 居り。 | 死ぬ。 | 死す。 | 据う。 |
| 往ぬ。 | 悔ゆ。 | 煮る。 | 用ふ。 | 朽つ。 | 信ず。 |

聳ゆ。 怖づ。 消ゆ。 論ず。

三 左の文中の動詞の活用に誤があればなほせ。

- (イ) 汝に出するものは汝にかへる。
- (ロ) 鷹は飢ゆとも穂はつまず。
- (ハ) 君に事を親に仕う。
- (ニ) 困難に堪えうる人は年老ひて憂なからむ。
- (ホ) 恥じてよく改め覺へて忘れず。

四 次の文中の動詞に活用形の誤つてゐるものがあれば

正せ。

- (イ) 老いて後悔ゆこと勿れ。
- (ロ) 人はパンのみにて生くものにあらず。
- (ハ) 日のくるを待ちて檜の岐阜提灯に火を點す。

口語動詞の活用

四段活用

第二章 口語動詞の活用

一 四段活用

(一) 與ふは受くよりも幸なり。  
 (ホ) 崩る崖、倒る家、逃げ惑ふ人々の泣き叫ぶ聲、友はそもいかにかせし。

讀め。	讀めば。	讀む時。	讀む。	讀みます。	讀まう。
死ね。	死ねば。	死ぬ時。	死ぬ。	死にます。	死なう。
居れ。	居れば。	居る時。	居る。	居ります。	居らう。
(命令形)	(假定形)	(連體形)	(終止形)	(連用形)	(未然形)

上一段活用

右の表の如く口語では文語のナ變・ラ變共に四段活用となる。  
 ◎文語動詞の已然形に當るところは、口語動詞ではすべて假定の條件を示す意味となるから、假定形と名づける。

口	文	口	文	口	文	活用
四段	ラ變	四段	ナ變	四段	ナ變	語幹/語尾
居		死		讀		未然
ら	ら	な	な	ま	ま	連用
り	り	に	に	み	み	終止
る。	り。	ぬ。	ぬ。	む	む	連體
る	る	ぬ。	ぬ。	む	む	已然(文)假定(口)
れ	れ	ね。	ね。	め	め	命令
れ	れ	ね	ね	め	め	

二 上一段活用

著よう。

落ちよう。

(未然形)

著ます。 落ちます。  
 著る。 落ちる。  
 著る人。 落ちる人。  
 著れば。 落ちれば。  
 著よ。 落ちよ。  
 (ろ)

(連用形) (終止形) (連體形) (假定形) (命令形)

口	文	口	文	活用 語幹/語尾
上	上	上	上	
一	二	一	一	未然
落		(著)		連用
ち	ち	き	き	終止
ち	ち	き	き	連體
ち <sup>〇</sup>	ち <sup>〇</sup>	き <sup>〇</sup>	き <sup>〇</sup>	假定(口)
ち <sup>〇</sup>	ち <sup>〇</sup>	き <sup>〇</sup>	き <sup>〇</sup>	命令
ち <sup>〇</sup>	ち <sup>〇</sup>	き <sup>〇</sup>	き <sup>〇</sup>	
ちよ(ろ)	ちよ	きよ(ろ)	きよ	

右の表の如く、文語の上二段上二段は口語では共に上一段活用

下一段活用

三 下一段活用

となる。

蹴よう。 受けよう。  
 蹴ます。 受けます。  
 蹴る。 受ける。  
 蹴る人。 受ける人。  
 蹴れば。 受ければ。  
 蹴よ。 受けよ。  
 (ろ)

(未然形) (連用形) (終止形) (連體形) (假定形) (命令形)

口	文	活用 語幹/語尾
下	下	
(蹴)		未然
け	け	連用
け	け	終止
ける	ける	連體
ける	ける	假定(口)
けれ	けれ	命令
けよ(ろ)	けよ	

カ行變格活用

右の表の如く、文語の下二段下一段は口語では共に下一段活用となる。

口	文
下一	下二
受	
け	け
け	け
け <sup>〇</sup>	く <sup>〇</sup>
る <sup>〇</sup>	る <sup>〇</sup>
け <sup>〇</sup>	く <sup>〇</sup>
れ <sup>〇</sup>	れ <sup>〇</sup>
け <sup>よ</sup> (ろ)	け <sup>よ</sup>

四 カ行變格活用

- 友は來<sup>来</sup>ない。(未然形)
- 友が來<sup>来</sup>た。(連用形)
- 友が來<sup>来</sup>る。(終止形)
- 友の來<sup>来</sup>る時。(連體形)
- 友が來<sup>来</sup>れば。(假定形)
- 友よ早く來<sup>来</sup>い。(命令形)

サ行變格活用

サ行變格活用

右の表の如く、口語では終止形及び命令形に文語と異なる點がある。

口	文	活用
カ變	(來)	語幹/語尾
こ	こ	未然
き	き	連用
く <sup>〇</sup>	く <sup>〇</sup>	終止
くる	くる	連體
くれ	くれ	已然(文)假定(口)
こ <sup>〇</sup>	こ <sup>〇</sup>	命令
い <sup>〇</sup>	よ <sup>〇</sup>	

五 サ行變格活用

- 運動をせ<sup>せぬ</sup>ぬ。(未然形)
- 運動をしない。(連用形)
- 運動をします。(終止形)
- 運動をする。(連體形)
- 運動をする時。(連體形)
- 運動をすれば。(假定形)

運動を せよ しろ

(命令形)

口	文	活用
	サ變	語幹語尾
	(爲)	未然
し	せ	連用
し	し	終止
する	す	連體
する	する	假然(文)
すれ	すれ	命令
し	せ	命令
ろよ	よ	命令

右の表の如く、口語では未然形終止形及び命令形に文語と異なる点がある。  
 以上の如く口語動詞の活用は四段上一段下一段力變サ變の五種となる。今左に文語・口語兩活用の種類を比べよう。

文語 (九種)	口語 (五種)
四段活用	四段活用
ナ行變格活用	ナ行變格活用

ラ行變格活用	上一段活用	上一段活用
上一段活用	下一段活用	下一段活用
下一段活用	カ行變格活用	カ行變格活用
カ行變格活用	サ行變格活用	サ行變格活用

◎口語動詞の活用の識別法

○語数の少ないもの

カ行變格活用

來る

サ行變格活用

爲る

○四段上一段下一段の三活用に屬する動詞は、その數が多いけ

○れども、左の見分法によつてこれを知ることが出来る。

一 「讀まぬ(ない)」「死なぬ(ない)」のやうに打消のぬ(ない)がア段の音につゞくものは四段活用である。

○「落ちぬ(ない)」「みぬ(ない)」のやうに打消のぬ(ない)がイ段の音につゞくものは上一段活用である。

一 「受けぬ(ない)」「飢ゑぬ(ない)」のやうに打消のぬ(ない)がエ段の音につゞくものは下一段活用である。

練習二

練習

- 一 次の文中の口語動詞の活用の種類と活用形とを答へよ。
- (イ) 最後に出る者が戸を締める。
- (ロ) 猿も木から落ちることがある。

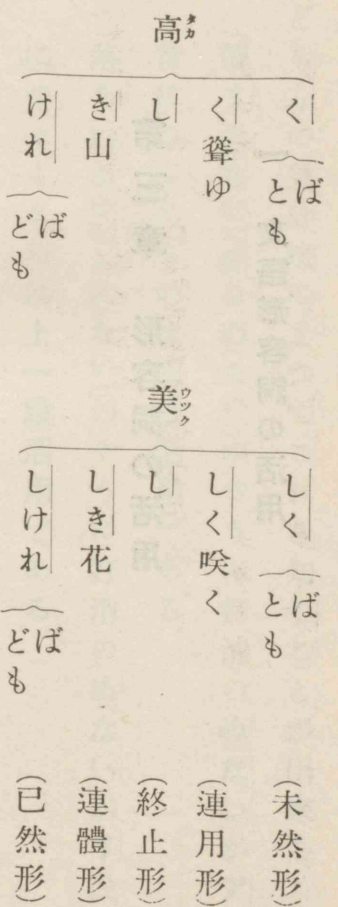
文語形容詞の活用

- (ハ) 恥ぢることを知らない者は自ら身を辱める者だ。
- (ニ) 右を立てれば左が立たぬ、両方立てれば身が立たぬ。
- (ホ) 湯を浴びた猫は水を恐れる。
- (ヘ) 猫が肥えれば鯨節がやせる。
- (ト) 打つも撫でるも親の恩。
- 二 次の口語動詞を活用させて六つの語形を作れ。
- 吠える。 朽ちる。 閉ぢる。 留める。 死ぬ。

第三章 形容詞の活用

一 文語形容詞の活用

語幹  
語尾  
活用



形容詞も動詞のやうに、變化しない部分と變化する部分とを有する。その變化しない部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。しかしてその活用には二種類ある。即ち右の例の「高」の如く語尾がくしきけれと活用するものをク活用といひ、「美」の如く語尾がしけれと活用するものをシク活用といふ。今これを表示すると

左の通りである。

文語形容詞活用表

活 用	語 幹	語 尾	未 然 形	連 用 形	終 止 形	連 體 形	已 然 形
ク 活 用	清	ク	ク	ク	シ	キ	ケレ
シク 活 用	美	シク	シク	シク	シ	シキ	シケレ

連用形は左例の如く副詞に轉ずる語形であるから、又副詞形ともいふ。

早く起き、遅く寝ぬ。

(注意) 形容詞には命令形がない。

二 口語形容詞の活用

(イ) ク活用

「高」

(ロ) シク活用

「美」

(連用形) (終止形) (連體形) (已然形)

口語形容詞の活用

文語形容詞活用表

波が高く立つてゐる。

花が美しく咲いてゐる。  
(連用形)

波が高い。

花が美しい。  
(終止形)

高い波が立つてゐる。

美しい花が咲いてゐる。

(連體形)

波が高ければ舟は出ない。

花が美しければ香も高い。

(假定形)

(注意) 文語の未然形「高くば」は口語では消滅し、已然形の「高ければ」を用ひて假定の意味をあらはす。

シク活用	ク活用	種活 用類	語 幹	語 尾	未 然	連 用	終 止	連 體	假 定
美	高				○	○	い	い	い
					○	く	い	い	い
						しく	しい	しい	しけれ

練習一三

練習

一 左の文中から形容詞を抜出し、その活用形をいへ。

文 語

- (イ) 景色よき地には歴史上のゆかしさなく、歴史上にゆかしき地には景色に風情なきもの世に多し。
- (ロ) 命長ければ恥多し。
- (ハ) 朝夕は凌ぎ易けれど、日中はたへがたし。
- (ニ) 遠き慮なければ必ず近き憂あり。
- (ホ) 雨も好し露も好し、霞も曇も天より降るものの面白からぬは無きが中に雪は特にめでたし。

口 語

- (イ) お世辭がよければ品物がわるい。
- (ロ) 美しい林檎も酸いことがある。
- (ハ) 石が大きければ水煙も夥しい。
- (ニ) 涼しい風に送られて琴の音がゆかしく聞える。
- (ホ) 色は美しいが味は辛くて、香もわるい。
- (ヘ) 身分は賤しいが行狀は正しい。



動詞の音便

第四章 音便

動詞の音便

動詞の連用形からてたりたに連なる時、その語尾が発音の便宜上他の音に轉ずることがある。これを動詞の音便といひ、その文字をも書き改めねばならぬ。動詞の音便に左の四種がある。

一 イ音便 きぎのい

- 説いて (文語) 口語
  - 説いた (口語)
  - 泳いで (文語) 口語
  - 泳いだ (口語)
  - 説いたり (口語)
  - 泳いだり (口語)
- 指してが指いてとなるやうに、稀に「し」が「い」に轉ずること

イ音便

もある。

二 ウ音便 びのう

- 買うて (文語) 口語
- 買った (口語)
- 買ったり (口語)

三 撥音便 にびみの、撥音んに轉ずるもの。

- 死んで (文語) 口語
- 死んだ (口語)
- 死んだり (口語)
- 學んで (文語) 口語
- 學んだ (口語)
- 學んだり (口語)
- 飲んで (文語) 口語
- 飲んだ (口語)
- 飲んだり (口語)

撥音便

ウ音便

促音便

四 促音便

ちひりの促音つに轉ずるもの。

勝ち。

勝つて (文語) (口語)  
勝つた (口語)

買ひ。

買つて (文語) (口語)  
買った (口語)  
買つたり (口語)

勝つたり (口語)

釣つて (文語) (口語)

釣り。

釣つた (口語)  
釣つたり (口語)

形容詞の音便

イ音便

形容詞の音便

一 イ音便 きのいに轉ずるもの。

善き哉 ———— 善い哉 (文語)

美しい花 ———— 美しい花 (口語)

二 ウ音便 くのうに轉ずるもの。

ウ音便

練習一四

練習

一 左の文中の動詞形容詞の音便を指摘してその原音を

示せ。

(イ) 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る。

(ロ) 柿食うて洪水の詩を草しけり。

(ハ) 何處かで逢うたことのあるやうな人だ。

暑くなる ———— 暑うなる (文語)  
深くて ———— 深くて (口語)

○又形容詞の連用形から轉じた副詞が、サ行變格の「す」と合して熟語の動詞となる時に、その語尾のくがウ音便を起すことがある。

ウ音便 全くす ———— 全うす (文語)

- (一) 學問は重荷を負うて坂を攀づるが如し。
- (ホ) その程々に従つて祈らぬ神佛もなし。

二 左の文の誤を正し、且つその理由を述べよ。

- (イ) 飛むで火に入る夏の蟲。
- (ロ) 養ふた上に敬ふことが大事だ。
- (ハ) 思ふて居るばかりでは埒があかぬ。言ふて見よ。
- (ニ) 苦しひことも恥づかしひこともすべて堪へ忍むで、仕事にあたらうと思ふ。
- (ホ) 首尾よふ卒業せられておめでたふございます。
- (ヘ) 負ふた子に髪なぶらるゝ暑さ哉。
- (ト) 轉むでも笑ふてばかり難かな。
- (チ) 任重ふして負荷に堪へず。

文語助動詞

受身

る

らる

可能

第五章 文語助動詞の種類及活用

一 受身の助動詞

一 犬人に打たる。

二 犬人に蹴らる。

右のるらるは或ものが他のものから動作を受ける意味をあらはすもので、これを受身の助動詞といふ。

受身の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	レ	レ	ル	ルル	ルレ	レヨ
らる	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	ラレヨ

(下二段活用に同じ)

二 可能の助動詞

る  
らる  
べし  
べかり

一 一日に十里の道を行かる。

二 六尺の堀も飛び越えらる。

三 腰間の秋水鐵をも断つべし。

四 その勢あたるべからず。

右のるらるべしべからはその動作を成し得る意をあらはすもので、これを**可能の助動詞**といふ。

可能の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	レ	レ	ル	ル	ルレ	○
らる	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	○
べし	ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ	○
べかり	ベカラ	ベカリ	(ベカリ)	(ベカル)	(ベカレ)	○

(形容詞の活用に同じ)

使役

す  
さす  
しむ

三 使役の助動詞

一 生徒に字を書かす。

二 大工に家を建てさす。

三 下男に田を耕さしむ。

右のすさすしむは、或ものが他のものに動作を行はせる意味をあらはすもので、これを**使役の助動詞**といふ。

使役の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	セ	セ	ス	スル	スレ	セヨ

崇 敬  
る  
らる  
す  
さす  
しむ

四 崇敬の助動詞

- 一 父は謠曲を好まる。
  - 二 校長は毎年上京せらる。
  - 三 殿下式場に臨ませらる。
  - 四 名刺を受けさせらる。
  - 五 皇太子御位に即かしめ給ふ。
- 右のるらるせさせしめは他の動作を敬ふ意をあらはすもので、これを崇敬の助動詞といふ。
- ◎崇敬のせさせしめは、通例崇敬の助動詞らる又は崇敬の動

さす	サセ
さす	サセ
さす	サス
さす	サスル
さす	サスレ
さす	サセヨ
しむ	シメ
しむ	シメ
しむ	シム
しむ	シムル
しむ	シムレ
しむ	シメヨ

(下二段活用に同じ)

時 完了  
つぬたり  
り

五 時の助動詞

- 詞給ふの上に結びつけて用ひる。
- (イ) 完了の助動詞
- 一 書を讀みつぬたり。
  - 二 書を讀めり。
- 右のつぬたりりは動作の完了した意をあらはすもので、これを完了の助動詞といふ。
- 完了の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
つ	テ	テ	ツ	ツル	ツレ	テヨ

(下二段活用に同じ)

過去

ぬ	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
たり	ラ	リ	リ	ル	レ	○
り	(ラ)	(リ)	リ	ル	(レ)	○

(ナ變に同じ)

(ラ變に同じ)

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

過去の助動詞

一 (ロ) 花、散りき。

二 花、散りけり。

右のきけりは動作の既にすぎ去つた意をあらはすもので、これを過去の助動詞といふ。  
過去の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き	○	○	キ	シ	シカ	○

(特殊活用)

けり	(ケラ)	(ケリ)	ケリ	ケル	ケレ	○
----	------	------	----	----	----	---

(ラ變に類する)

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

未來の助動詞

一 (ハ) 明日、出發せむ。(ん)

右のむ(ん)は動作の未來に起る意をあらはすもので、これを未來の助動詞といふ。  
未來の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む	○	○	ム	ム	メ	○

(特殊活用)

六 推量の助動詞

一 靜心なく花の散るらむ。

未來

む(ん)

推量

らむ

けむ  
べし  
む

二 いつの頃なりけむ、確には覺えず。  
 三 明日は雨降るべし。  
 四 花咲かむ。

右のらむけむべしむは事物を推量する意をあらはすもので、これを推量の助動詞といふ。但しむは未來の助動詞の活用に同じである。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
らむ	○	○	ラム	ラム	ラメ
けむ	○	○	ケム	ケム	ケメ
べし	ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ

(特殊活用)

(形容詞の活用に同じ)

打消

ず  
さり  
じ  
まじ

七 打消の助動詞

- 一 花咲かず。
- 二 予は出席せざりき。
- 三 君はまだ遠くは行かじ。
- 四 夜はまだ明くまじ。

右のざざりじまじは打消の意味をあらはすもので、これを打消の助動詞といふ。  
 打消の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ	○
ざり	ザラ	ザリ	ザリ	ザル	ザレ	ザレ

(特殊活用)

(ラ變に同じ)

指定

なり

たり

八 指定の助動詞

- 一 かしこに見ゆるは我が家なり。
- 二 花の散りくるなり。
- 三 彼の性質は甚だよろしきなり。
- 四 君君たり、臣臣たり。

右のなりは事物動作有様を、たりは事物を指し定める意をあらはすもので、これを指定の助動詞といふ。  
指定の助動詞は次のやうに活用する。

まじ	じ
マジク	○
マジク	○
マジ	ジ
マジキ	ジ
マジケレ	ジ
○	○

(形容詞の活用に同じ)

咏嘆

なり

けり

九 咏嘆の助動詞

- 一 秋の野に人待つ蟲の聲すなり。
  - 二 見渡せば花も紅葉もなかりけり。
- 右のなりけりは咏嘆の意をあらはすもので、これを咏嘆の助動詞といふ。

咏嘆の助動詞は次のやうに活用する。

なり	助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
○						
けり						
○						
ナリ						
ケリ						
ナル						
ケル						
ナレ						
ケレ						

(ラ變に同じ)



比況

ごとし

一〇 比況の助動詞

- 一 落花雪の如し。
- 二 歲月流るゝ(が)如し。

右の如しは事物を比較説明する意をあらはすもので、これを比況の助動詞といふ。

比況の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
ごとし	ゴトク	ゴトク	ゴトシ	ゴトキ	〇

(形容詞の活用に類す)

希望

たし

一一 希望の助動詞

- 一 早く東京に行きたし。

右のたしは希望の意をあらはすもので、これを希望の助動詞と

いふ。希望の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
たし	タク	タク	タシ	タキ	タケレ

(形容詞の活用に同じ)

練習一五

練習

- 一 左の文中の助動詞を抜出してその種類をいへ。

- (イ) たゝかれて晝の蚊を吐く木魚かな。
- (ロ) 勉強は幸福の母なり。
- (ハ) すぎたるは猶及ばざるが如し。
- (ニ) 秋風に初雁が音ぞ聞ゆなる。
- (ホ) 君はまだ遠くは行かじ、我が袖の袂の涙かわきはてねば。
- (ヘ) かなはじとや思ひけむ、太刀を捨てて逃げ失せたり。

口語助動詞

受身

れる

られる

- (ト) げに持つべきものは子なりけり。
  - (チ) これは殿下の植ゑさせ給ひし松なり。
- 二 次の助動詞の活用を示せ。
- す。き。如し。む。らる。さす。

第六章 口語助動詞の種類及活用

一 受身の助動詞

一 犬にかまれる。

二 先生にほめられる。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ(ロ)
られる	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	ラレヨ(ロ)

可能

れる

られる

二 可能の助動詞

一 この本は私にも読まれる。

二 朝五時には起きられる。

◎可能の助動詞の活用は受身の助動詞と同じであるが、命令形がない。

使役

せる

させる

三 使役の助動詞

一 生徒に字を書かせる。

二 大工に家を建てさせる。

崇敬

四 崇敬の助動詞

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	セ	セ	セル	セル	セレ	セヨ(ロ)
させる	サセ	サセ	サセル	サセル	サセレ	サセヨ(ロ)

れる  
られる

ます

- 一 父上はよく字を書かれる。
  - 二 先生は毎月上京せられる。
  - 三 今日は雪が降ります。
- ◎活用は受身の助動詞に同じであるが、命令形がない。  
このますは動作の主に対する尊敬ではなくて、話の相手に對する敬意を示すものである。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	マセ	マシ	マスマス	マスマス	マスレ	マセ マシ

五 時の助動詞

時  
過去

た

- (イ) 過去の助動詞
- 一 昨日雪が降つた。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	タラ	タリ	タ	タ	タラレ	○

未來

う  
よう

推量

う  
よう  
らしい

まい

- (ロ) 未來の助動詞
- 一 明日は雨が降らう。
- 二 次の日曜日に運動をしよう。
- ◎う・よう共に活用せぬ。

六 推量の助動詞

- 一 雨が降らう。
- 二 月が出よう。
- 三 やがて櫻も咲くらしい。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
らしい	○	ラシク	ラシイ	ラシイ	○	○

- ◎なほこの外に推量の否定まいがある。
- 四 彼は恐らく行くまい。

打消

ぬ ない  
まい

七 打消の助動詞

- 一 書を讀まぬ。ない。
- 二 風は吹くまい。

指定

だのだ  
です

八 指定の助動詞

- 一 これは梅の花だ。 梅の花が散るのだらう。
- 二 これは梅です。

まい	ぬ	ない	助動詞
○	○	○	未然
○	○	ナク	連用
マイ	ヌ(ン)	ナイ	終止
マイ	ヌ(ン)	ナイ	連體
○	ネ	ナケレ	假定
○	○	○	命令

です	のだ	助動詞
デセ	ノダラ	未然
デシ	ノダツ	連用
デス	ノダ	終止
○	○	連體
○	○	假定
○	○	命令

比況

やうだ

九 比況の助動詞

- 一 人生は夢のやうだ。

やうだ	助動詞
ヤウダラ	未然
ヤウダツ	連用
ヤウダ	終止
ヤウナ	連體
○	假定
○	命令

希望

たい

一〇 希望の助動詞

- 一 早く故郷に歸りたい。

たい	助動詞
タク	未然
タク	連用
タイ	終止
タイ	連體
タケレ	假定
○	命令

練習一六

練習

- 一 左の文中の助動詞を指摘してその種類をいへ。
- (イ) 麥の收穫に使はれる馬はその麥を食ふことは出来ぬ。

- (ロ) 明日雨は降るだらう。しかし風は吹かないだらう。  
指す 推量 未来
- (ハ) 「君は何か読んで見たいと思ふ書物はありますか。」かう問はれてすぐ  
に書物の名の言へないのは恥辱だ。  
指す 尊敬 打消
- (ニ) 今頃は定めしこちらの話をして居よう。  
推量
- (ホ) 今日は晝を習つた後で、一時間の散歩をした。  
指す

第七章 文語動詞と文語助動詞との接続 (別表参照)

一 未然形に接続する助動詞

- (イ) 受身 (可能 崇敬)  
る || 四段・ナ行變格・ラ行變格  
らる || 上一段・上二段・下二段・カ行變格・サ行變格  
犬に追はる。 母に死なる。  
鼠、猫に捕へらる。 よく運動せらる。

文語動詞と文語助動詞との接続

- (ロ) 使役 崇敬  
す || 四段・ナ行變格・ラ行變格  
さす || 上一段・上二段・下二段・カ行變格・サ行變格  
しむ || 全動詞  
書を讀ます。 位に即かせ給ふ。  
毬を受けさす。 農夫に耕作せさす。  
書を讀ましむ。 よく運動せしむ。

- (ハ) 現在完了 一リ || サ行變格  
運動せり。

- (ニ) 未來 一む || 全動詞  
書を讀まむ。 花を見む。

- (ホ) 打消 じ ず ざり  
|| 全動詞

書を讀ま<sup>ず</sup>。 罪を受け<sup>じ</sup>。  
讀むこと能はざ<sup>り</sup>き。

二 連用形につゞく助動詞

(イ) 現在完了 ぬ つ  
たり || 全動詞

書を讀み<sup>つ</sup>。 日暮れ<sup>ぬ</sup>。

花を見たり。

◎ぬは十行變格活用の動詞にはつゞかない。

(ロ) 過去 き  
けり || 全動詞

書を讀み<sup>き</sup>。 昔人あり<sup>けり</sup>。

但し、過去の助動詞<sup>き</sup>がカサ變格活用の動詞につゞく場  
合に限つて、左のやうなつゞき方をする。

サ變	カ變	未來
爲 <sup>セ</sup> し <sup>し</sup> か	來 <sup>キ</sup> し <sup>し</sup> か	連用
爲 <sup>シ</sup> き	來 <sup>キ</sup> し <sup>し</sup> か	

(ハ) 推量 けん || 全動詞

いつの頃より見知り<sup>けん</sup>。

(ニ) 希望 たし || 全動詞

花を見<sup>たし</sup>。 書を讀み<sup>たし</sup>。

三 終止形につゞく助動詞

(イ) 推量 らむ べし || 全動詞

静心なく花の散るらむ。午前八時出頭すべし。

(ロ) 打消 まじ || 全動詞  
罪を受くまじ。

但し、右のらむべしまじがラ行變格活用の動詞につゞく時は、その連體形に接続する。

(ハ) かく有るらむ。君側に侍るべし。

咏嘆 なり || 全動詞

蟲の聲すなり。汝と今や別るなり。

四 連體形につゞく助動詞

(イ) 指定 なり || 全動詞

朝早く起くるなり。  
但し、なりは體言の下にもつゞく。  
これは花なり。

指定のたりは用言の下にはつゞかずして、體言の下にのみつゞく。ゆゑに用言の下のたりはすべて現在完了の助動詞である。

(ロ) 比況 如し || 全動詞

水の流るゝ如し。  
如しは助詞がを挟んで動詞形容詞の連體形にのを挟んで名詞につゞくことが多い。  
光陰流るゝが如し。  
花の美しきが如し。

光陰矢の如し。  
五 已然形につゞく助動詞

(イ) 現在完了ーリ 四段活用  
學校に行けり。

練習一七

一 左の文中から助動詞を抜出して、そのつゞき方を説明

- (イ) 物語せさせて夜を更しぬ。  
*動* せよ。
- (ロ) 午前十時までに出勤すべし。
- (ハ) 勉強せし甲斐ありて首尾よく入學せり。
- (ニ) 自らなし得ざることば之を人に強ふべからず。
- (ホ) 吾は終夜眠らずして考へたり。

(ヘ) 淺草の鳩も淋しく思ふらん日ごと見なれしわれを見ぬため。

二 次の文に誤があれば正し、且つその理由を説明せよ。

- (イ) 公園内に車を乗り入るべからず。
- (ロ) 再び耳を傾けれど寂として聲なかりき。
- (ハ) 君は未だ東京を見まじ。
- (ニ) 齡長ける人は年少の者を勞るべし。
- (ホ) 彼は本年も入學試験を受けり。
- (ヘ) 汝が考ふ如く容易に破られまじ。
- (ト) 我等の渴望しし平和の曙光は漸く見えそめぬ。
- (チ) かの友は既に死にぬ。
- (リ) かゝる過は再びせまじ。

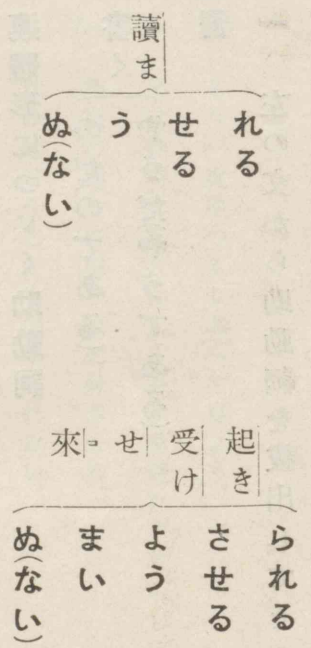
三 動詞の未然形・連用形・終止形につゞく助動詞を列舉せ



- よ。
- 四 指定のなりと咏嘆のなりとが動詞に接続する時、その接続の異なつてゐる點をあげよ。
- 五 指定のたりと時のたりとが文中にある時、その接続の上から見て、これをどんなに區別するか。
- 六 現在完了の「り」と動詞との接続法をのべよ。
- 七 過去の「き」「し」「しか」とカサ變格活用とのつゞき方をのべよ。

第八章 口語動詞と口語助動詞との接続

一 未然形につゞく助動詞



右の中、うは四段に、ようは四段以外の動詞につゞく。但し、ようとないとはサ變の活用に對してはしにのみつゞき、せにはつゞかない。

勉強しようと思ふ。(勉強せようは誤)

運動しない。(運動せないは誤)

まいは四段活用に對してはその終止形につゞき、サ變の活用に對してはしにのみつゞき、せにはつゞかない。

書を讀むまい。  
四段終止  
彼は感じまい。

二 連用形につゞく助動詞

押し  
た  
たい

起き  
た  
たい

三 終止形につゞく助動詞

讀むまい。

霽れるらしい。

四 連體形につゞく助動詞

書く  
のだからである  
やうだ(やうである)

練習一八

練習

- 一 左の文から助動詞を抜出して、そのつゞき方を説明せ

よ。

- (イ) もう一度ゆつくり考へて見よう。
- (ロ) 兄は野球をするらしく、弟は庭球をするらしい。
- (ハ) 那須の與一に扇の的を射させる。
- (ニ) 私にはどうしても信ぜられない。
- (ホ) たゞ一度で懲りさせたらしい。

第九章 助詞の用法

助詞の用法

助詞には種々あつて、その用法も亦複雑である。今その中で誤謬の生じ易いものについて其の用法を説明する。

一 ぞなむこそ  
舜何人ぞ。  
さる事は我は知らぬぞ。

ぞ

なむ

右は文の終にぞを添へて強く指し示す意を表してゐる。

花ぞ落つる。

人と争はざるなむ賢き。

右は文の中程にぞやなむを添へたもので、かゝる場合には下は連體形で結ぶ定めである。

花こそ咲け。

水こそ清けれ。

こそ

右のこそはぞなむよりも一層強く指し示す意を有する助詞で、下は已然形で結ぶ定めである。

二 やか

かゝることありやなしや。

かゝることあるかなきか。

夜は靜かに眠らるや。

か や

夜は靜かに眠らるるか。

右は文の終にやかを添へて疑の意を表したものである。

花や咲きし。

誰かある。

右は文の中程にやかを添へて疑の意を表したもので、下は連體形で結ぶ定めである。

誰かその悲慘に涙を流さざるべき。

其の時悔ゆとも甲斐あらんや。

かくてやは果つべき。

いかで悲しみ嘆くべきかは。

右のやかは反語の意をあらはす。而してかゝる場合に感動の助詞はを伴ひてやはかはとして表れることが多い。

已に述べたやうに文の中程にぞなんこそやかがあると、下は連

反語

係結

體形又は已然形で結ぶ定めである。これを係結の法則といふ。但し口語にはこの法は存しない。

係語

結語

ぞなんやか……………連體形

こそ……………已然形

練習一九

練習

一 次の文の係結について説明せよ。

(イ) 勉強に倦み給はん折は花なむこよなき慰めなる。

(ロ) 中江藤樹こそ眞の儒者なれ。

(ハ) たゞ涙を催す種とぞなりし。

(ニ) 東寺の塔を松の間に墨がきなせる筆の力ぞ巧なる。

三 ばともども

ば

明日雨降らば延期せむ。

明日天氣よくば旅行せむ。

今日雨降れば行かず。

水清ければ大魚棲まず。

右の如く**ば**が未然形に結びつく時は**假定**、已然形に結びつく時は**確定**の意味をあらはす。

口語では左例の如く已然形で假定確定兩様の意をあらはす。

明日雨が降れば延ばさう。

水が清ければ魚が棲まない。

鳥の鳴かぬ日はありとも親を思はぬ日はあらじ。

たとひ兵寡くともよもや敗るることはあらじ。

花咲けども鶯未だ來鳴かず。

とも

ども

ども

この品好ければども買はず。

右の如くともが動詞の終止形、形容詞の未然形に結びつく時は假定どもが動詞、形容詞の已然形に結びつく時は確定の意をあらはす。

口語—てもけれどもても。

鳥の鳴かない日はあつても……

品は好いけれども……

茶は飲んでも……

四と

宗教と道德との關係。

京都と神戸と長崎とに行く。

と

並列のと

動作の標準を示す  
と

だに

すら

さへ

事物を並列するとき、右の例の如くその一々の下にとを添へる定めであるけれども、誤解を生じない時は、最終の語句の下に之を省いても妨げない。(許容事項参照)

北條時宗、幼名を太郎といふ。

あの川を澱川と呼ぶ。

右のとは動作の標準を示す。

五だにすらさへ

鳥にだにしかず。

草木すら情あり。

雨降り風さへ吹く。

右の内だにすらは軽きをあげて重きを言外に思はせ、さへはあ  
るが上に更に添ひ加はる意の助詞である。

な...そ

口語ではだにもすらもなく、さへが一般に用ひられる。

六 なな...そ

決して怠るな。

危き場所に居るな。

右の如くなを動詞の終止形に添へると、その動作をすなと禁止する意を表す。但し、ラ變の動詞に限つて、その連體形に添はる。

かくなのたまひそ。 深くな咎めそ。

吹く風をなこそその關と思へども道もせに散る山櫻かな。

近く寄りて過なせそ。

な...そはなと同じく禁止の意をあらはす。而してこの場合にそは動詞の連用形を受ける。但し、カサ變格の動詞に限り、その未然形を受ける。

ばや  
なむ

七 ばやなむ

繪を巧に畫かばや。

我が子學者にならなむ。

右のばやなむは願望の意をあらはし、共に未然形につく。

八 にへ

一〇 學校に行く。

大阪に住む。

前へ進む。

彼方へ向ふ。

右のには場所を示し、へは方向を示す。

口語ではへにも同じやうに用ひられる。

學校へ行く。

東京へ行く。

九 がにを

大いに努力せしが遂に效なかりき。

に

日暮れたるに宿るべき家もなし。  
いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるる野路  
の村雨。

右の「が」に「を」は語句を接續する助詞であつて、活用する語の連體形に結びつく。

口語では「が」は文語と同じであつて、「に」を「は」の「に」に相當する。

10 27

日くれて道遠し。

言はでやみぬ。(ではすでの變化したものである)

右の「て」では語句を接續する助詞で、「て」は連用形に、「て」は未然形に結びつく。

練習二〇

練習

一 左の文中の傍線を引ける助詞を説明せよ。

- (イ) 勉強さへすればどんなことでも出来る。
  - (ロ) もし不都合なる點あらば指摘せらるべし。
  - (ハ) 良からぬ小説などな読み給ひそ。
  - (ニ) 月を見れども楽しからず、鳥を聞けども嬉しからず。
  - (ホ) 波風の静かなる日も舟人はかちに心を許さざらなむ。
  - (ヘ) わるいことは決してするな。
- 二 左の文に誤があれば正し、且つその理由を述べよ。
- (イ) 萬一失敗すれども決して落膽すべからず。
  - (ロ) もし御差支も候へば御一報下されたく候。
  - (ハ) 車へ乗りて行かむ。
  - (ニ) 雪だに生憎に降りいでて寒氣いよく加はりぬ。

接頭語

- (ホ) 志を遂げんと欲すれば須く努力すべし。
- (ヘ) 功を急ぎて過するな。

第十章 接頭語・接尾語

一 接頭語

單獨では用ひられず、ある他の語の上について、其の語と熟語をなすものを接頭語といふ。

- い……います
- うひ……初陣
- お……お内
- か……か細し
- い……いや高し
- うら……うら悲し
- おん……おん前
- か……か弱し

接尾語

- け……け高し
- す……す肌
- ほの……ほの見ゆ
- み……み雪
- を……を川
- さ……さ霧
- た……たなびく
- ま……ま木
- もの……もの寂し

接頭語には意味を添へるものと、添へないものがある。而して接頭語が添うて出来た熟語はもとの語と品詞を同じうする。

二 接尾語

單獨では用ひられず、ある他の語の下について、其の語と熟語をなすものを接尾語といふ。

- ども……私ども
- がた……あなたがた
- ら……僕ら
- たち……友だち



どの……次郎どの

(以上複数をあらはすもの)  
さま……兄さま

君……山本君

(以上敬意をあらはすもの)

さ……黒さ

み……厚み

(以上形容詞の語幹について名詞をつくるもの)

めく……春めく

ばむ……黄ばむ

さぶ……神さぶ

がる……うれしがる

(以上名詞形容詞について動詞をつくるもの)

らし……男らし

けし……露けし

(以上名詞について形容詞をつくるもの)

すがら……夜すがら

づつ……少しづつ

がてら……花見がてら(以上名詞形容詞等について副詞をつくるもの)

以上列挙した例のやうに接尾語はいづれも或意味を添へるものである。而して接尾語が添うて出来た熟語は、接尾語の性質によつて品詞を異にするものである。

### 第十一章 品詞の轉成

#### 品詞の轉成

#### 轉成の名詞

##### 一 轉成の名詞

(イ) 動詞の連用形から || 光 霞 氷 謠

(ロ) 動詞の終止形から || 茂シゲル 薰カウル 勝イサメル (以上人名) かげろふ

すまふ。

(ハ) 形容詞の語幹に接尾語 **みさ** を添へる。厚み || 重さ ||

(ニ) 形容詞の終止形から || あかし(燈) すし(鮓) からし(芥子)。

轉成の代名詞

二 轉成の代名詞

(イ) 名詞から 君 僕 小生 殿 臣

轉成の副詞

三 轉成の副詞

(イ) 名詞から 終日 食はず 終夜 寝ねず

今日 雨降る

(ロ) 動詞の連用形から

たとひ 雨が降るとも……

それはあまり ひどい ことです

(ハ) 形容詞の連用形から

水よく 流る。 花 少しく 開く。

轉成の接續詞

四 轉成の接續詞

(イ) 名詞から

暑さ 甚しく 候處、御障りも 無之 候や。

(ロ) 動詞から

土曜日 及び 日曜日 は 休業す。

(ハ) 副詞から

山また 山を 越ゆ。

練習二

練習

一 左の文中から 接頭語と 接尾語とを 摘出せよ。

(イ) さ夜ふけて ほの暗き 御あかしの影ものさびし。

(ロ) 春來れば 雪消の澤に 袖垂れて まだうら若き 若菜をぞ 摘む。

(ハ) 秋らしく なりていと 露けし。

(ニ) 同じ自然の 御母の御手に 育ちし 姉と妹、み空の花を 星といひ、わが世の 星

紛れ易い品詞

たり

一 たり

多くの單語の中には語形が同じで、品詞を異にするものがあり、又同じ品詞の中でも種類を異にするものが多いから、品詞を鑑別する場合に於ては、特にこれ等の同形異義の語に注意せねばならぬ。左にその主なるものを説明しよう。

を花といふ。

(ホ) 色々御世話になりました。この御恩は決して忘れませぬ。

二 形容詞の轉じて副詞となれるもの五六をあげよ。

三 左の名詞の構成を説明せよ。

たうゑ(田植)。よろこび。楽しみ。読み書き。憂。末廣。振舞。

第十二章 紛れ易い品詞

なり

二 なり

書を読みたり (現在完了の助動詞)

君君たり臣臣たり (指定の助動詞)

山巍然たり (ラ行變格の終止形)

建築なりぬ (動詞)

彼は學生なり (指定の助動詞)

鐘の音すなり (咏嘆の助動詞)

三 なむ

散りなむ (なは現在完了の助動詞ぬの未然形、むは未來

の助動詞)

咲かなむ (願望の助動詞)

月なむ見ゆる (係の助詞)

ぬ

四 ぬ

花咲きぬ (現在完了の助動詞)

花の咲かぬ枝 (打消の助動詞の連體形)

な

五 な

ゆめ忘るな (禁止の助詞)

忘れじな (感動の助詞)

花散りなば (現在完了の助動詞ぬの未然形)

しか

六 しか

昨日こそ早苗とりしか (過去の助動詞きの已然形)

君は何時歸りしか (しは過去の助動詞きの連體形かは

疑問の助詞)

練習三

練習

左の文中傍線を施した語の文法上の差異を述べよ。

(イ) かくこそ思ひしか。

いつの年うせ給ひしか。

(ロ) 死にし子顔よかりき。

露と消えにし命かな。

(ハ) 汝と今や別るなり。

汝と今別るるなり。

その謀空しくなりぬ。

(ニ) 死にたる人。

入の人たる道。

(ホ) つきぬ怨。

食盡きぬ。

正修新制中學文典終

附錄 文法上許容ニ關スル事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ス」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二 「シク・シシキ活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。  
例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。  
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。
- 四 「コトナリ」「異」ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。
- 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。  
例 手習サス。  
周旋サス。  
賣買サス。
- 六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

- ナシ。
- 例 罪サル。  
評サル。  
解釋サル。
- 七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。  
例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。  
上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。
- 八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。  
例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。  
攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。  
九 てにをはノ「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ連続スルモ妨ナシ。  
例 花ヲ見ルノ記。  
學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一 てにをはノ「ト」モ「ノ」動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習

慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一二 てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞・受身ノ助動詞・及時ノ助動詞ノ連體言ニ連

續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラルト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

一三 語句ヲ列擧スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最

終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五 てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六 「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承諾セララルモノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ニノ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格、又ハ、誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ、中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ文部省ニ於テハ、從來破格、又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ、之ヲ許容シテ、在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今文部省ニ於テハ教科書檢定、又ハ編纂ノ場合ニ之ヲ應用セントス。

(明治三十八年十二月二日 文部省告示第百五十八號)

[表 二 第]

用活詞容形語口				用活詞容形語文			
シク活用	ク活用	種類	活用の	シク活用	ク活用	種類	活用の
涼	清	語幹		涼	清	語幹	
○	○	未然	活用 形	シク	ク	未然	活用 形
シク	ク	連用					
シイ	イ	終止					
シイ	イ	連體					
シケレ	ケレ	假定					

サ行變格	ス行變格
(爲)	(才)
シセ	コ
シ	キ
スル	クル
スル	クル
スレ	クレ
シセヨ	コイ

（明治三十八年十二月二日）  
 文部省告示第百五十八号  
 第一号  
 第二号  
 第三号  
 第四号  
 第五号  
 第六号  
 第七号  
 第八号  
 第九号  
 第十号  
 第十一号  
 第十二号  
 第十三号  
 第十四号  
 第十五号  
 第十六号  
 第十七号  
 第十八号  
 第十九号  
 第二十号  
 第二十一号  
 第二十二号  
 第二十三号  
 第二十四号  
 第二十五号  
 第二十六号  
 第二十七号  
 第二十八号  
 第二十九号  
 第三十号  
 第三十一号  
 第三十二号  
 第三十三号  
 第三十四号  
 第三十五号  
 第三十六号  
 第三十七号  
 第三十八号  
 第三十九号  
 第四十号  
 第四十一号  
 第四十二号  
 第四十三号  
 第四十四号  
 第四十五号  
 第四十六号  
 第四十七号  
 第四十八号  
 第四十九号  
 第五十号  
 第五十一号  
 第五十二号  
 第五十三号  
 第五十四号  
 第五十五号  
 第五十六号  
 第五十七号  
 第五十八号  
 第五十九号  
 第六十号  
 第六十一号  
 第六十二号  
 第六十三号  
 第六十四号  
 第六十五号  
 第六十六号  
 第六十七号  
 第六十八号  
 第六十九号  
 第七十号  
 第七十一号  
 第七十二号  
 第七十三号  
 第七十四号  
 第七十五号  
 第七十六号  
 第七十七号  
 第七十八号  
 第七十九号  
 第八十号  
 第八十一号  
 第八十二号  
 第八十三号  
 第八十四号  
 第八十五号  
 第八十六号  
 第八十七号  
 第八十八号  
 第八十九号  
 第九十号  
 第九十一号  
 第九十二号  
 第九十三号  
 第九十四号  
 第九十五号  
 第九十六号  
 第九十七号  
 第九十八号  
 第九十九号  
 第一百号



第]

[表 一 第]

用活詞形容語文		種 類	活 用 の
ク 活 用	種 類		
涼	清	語 幹	
シク	ク	未 然	活
シク	ク		
シク	ク	連 用	用
シ	シ		
シ	キ	終 止	形
シキ	ケ		
シケレ	ケレ	已 然	

表用活詞動語口										種 類	活 用 の
サ行變格	カ行變格	下 一 段		上 一 段		四 段			語 幹		
(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	有	死	書		未 然	活 用 形
シセ	コ	ケ	ネ	キ	キ	ラ	ナ	カ		連 用	
シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	リ	ニ	キ		終 止	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク		連 體	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク		已 然	
スレ	クレ	ケレ	ネレ	キレ	キレ	レ	ネ	ケ		命 令	
シセヨ	コイ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	レ	ネ	ケ			

表用活詞動語文										種 類	活 用 の
ラ行變格	ナ行變格	サ行變格	カ行變格	下 一 段	下 二 段	上 一 段	上 二 段	四 段	語 幹		
有	死	(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	書		未 然	活 用 形
ラ	ナ	セ	コ	ケ	ネ	キ	キ	カ		連 用	
リ	ニ	シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	キ		終 止	
リ	ヌ	ス	ク	ケル	ヌ	キル	ク	ク		連 體	
ル	ヌル	スル	クル	ケル	ヌル	キル	クル	ク		已 然	
レ	ヌレ	スレ	クレ	ケレ	ヌレ	キレ	クレ	ケ		命 令	
レ	ネ	セヨ	コヨ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	ケ			

[表二第]

用活詞容形語口			用活詞容形語文		
シク活用	ク活用	種類の	シク活用	ク活用	種類の
涼	清	語幹	涼	清	語幹
○	○	未然	シク	ク	未然
シク	ク	連用	シク	ク	連用
シイ	イ	終止	シ	シ	終止
シイ	イ	連體	シキ	キ	連體
シケレ	ケレ	假定	シケレ	ケレ	已然

[表一第]

表用活詞動語口										表用活詞動語文																			
サ行變格	カ行變格	下一段		上一段		四段		種類	活用の	ラ行變格	ナ行變格	サ行變格	カ行變格	下一段	下二段	上一段	上二段	四段	種類	活用の									
(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	有	死	書	語幹	有	死	(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	書	語幹	有	死	(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	書	語幹
シセ	コ	ケ	ネ	キ	キ	ラ	ナ	カ	未然	ラ	ナ	セ	コ	ケ	ネ	キ	キ	カ	未然	ラ	ナ	セ	コ	ケ	ネ	キ	キ	カ	未然
シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	リ	ニ	キ	連用	リ	ニ	シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	キ	連用	リ	ニ	シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	キ	連用
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	終止	リ	ヌ	ス	ク	ケル	ヌ	キル	ク	ク	終止	リ	ヌ	ス	ク	ケル	ヌ	キル	ク	ク	終止
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	連體	ル	ヌ	スル	クル	ケル	スル	キル	クル	ク	連體	ル	ヌ	スル	クル	ケル	スル	キル	クル	ク	連體
スレ	クレ	ケレ	ネレ	キレ	キレ	レ	ネ	ケ	已然	レ	ヌレ	スレ	クレ	ケレ	ヌレ	キレ	クレ	ケ	已然	レ	ヌレ	スレ	クレ	ケレ	ヌレ	キレ	クレ	ケ	已然
シセヨ	コイ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	レ	ネ	ケ	命令	レ	ネ	セヨ	コヨ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	ケ	命令	レ	ネ	セヨ	コヨ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	ケ	命令







[表 六 第]

法續接のと詞容形・詞動と詞助續接

詞 容 形	詞	動
と も ば		で
		つ つ
		と も
に を が	に を が	(と も)
ど も ど ば	ど も	ど

○括弧内のは今文にのみ用ひらるゝもの。

[表 三 第]

表 用 活 詞 動 助 語 文

行	詞	動	助	語	文
一	と	も	ば	で	
二	つ	つ			
三	と	も			
四	に	を	が	(と も)	
五	ど	も	ど	ば	

表 六 第]

上詞容形・詞動と詞助續接

詞	動			
	で	ば	未然	
	つつ	て	連用	
	とも	と	終止	
に	を	が	(とも)	と
	ども	ど	ば	已然

[表 五 第]

法續接詞動助詞動

り (サ變に 限る)	じ	ざ り	す	む	し む	さ す (二段・カ・ 上下・一・ 用に限る括)	す (四段・ナ・ラ變 括用に限る)	ら る (二段・カ・ 上下・一・ 用に限る括)	る (四段・ナ・ラ變 括用に限る)	未然形に
			た し	け む	け り	き (カサ變形括用 に例外がある)	た り (時)	ぬ	つ	連用形に
ラ 連體形に 限つ			な り (咏嘆)	ま じ			べ か り	べ し	ら む	終止形に
なりは體言 にもついで 如しは助詞 のしがにつ づのことが ある。								こ と し	な り	連體形に
									り (四段活 用に限)	已然形に

[表 六 第]

法續接のと詞容形・詞動と詞助續接

詞 容 形	詞	動		
とも ば		で ば	未	然
		つつ て	連	用
		とも と	終	止
に を が	に を が	(とも) と	連	體
ども ど ば	ども ど	ば	已	然

○括弧内のものは今文にのみ用ひらるゝもの。

[表 五 第]

法續接詞動助詞動

り (サ變に 限る)	じ	ざ り	す	む	し む	さす (上下、一、 二、三、カ、 サ、カ、カ、 用、限る)	す (四段、ナ、ラ、 終、括、用、に、限る)	らる (二、四、カ、 サ、カ、カ、 用、に、限る)	る (四段、ナ、ラ、 終、括、用、に、限る)	未 然 形 に
			た し	け む	け り	さ (カ、サ、 終、括、用、 に、限る、 例、外、 が、あ る)	たり (時)	ぬ	つ	連 用 形 に
			なり (咏嘆)	ま じ			べ かり	べ し	ら む	終 止 形 に
								ご とし	な り	連 體 形 に
									り (四段、 用、に、 限る)	已 然 形 に

ラ變に限り  
づ連體形につ

なりは體首  
にもつづく。  
如しは助詞  
づ、が、につ  
ある。





交際書翰家規

卷之十一 祝賀

律法原照  
照成律法  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照



律法原照

律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照

大正新文館  
東京  
文館

律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照  
律法原照

7/100

修文館發行

文庫

32

972

広島大学図書

2000068972

